

地下茎とあじさい

2号

S.56.
9.15発行

彼岸花とデングカンどり

= 「テウサレ」のこと =

今年、はじめて、彼岸花を見たのは、
夏休みも終りの8月31日でした。前の田
の畔でした。ところが、今はもう「彼
岸」、家のまわりの畔という畔は、紅い
松明の行列です。

この花を子どもとこのころ、
「テウサレ」と呼び、さわると手がツカ
ると教えられながら、これを、首飾り
(数珠)のようにして、首からさげて、
遊んだ記憶がある。

秋を深まりかけたころ、稲穂が頭をさ
げはじめ、山が色づきはじめたころ、野
を紅く染める「テウサレ」の列は、子ども
のころの思い出とボカさなり、異様に
「まぶしい」光景である。

= 生活のなかで生きてきた花 =

この花には、地方によっていくつかの
呼び名がある。

この地方では、主にうつあげられる。
*1 其一つは前にあげた狐の刺刀で、是は
剪ら其葉をさして讀み、刃には、シコズ
バナ 今一つはテウサレである。……」

各地では、

*2 「ヨリカケバナ、ケサバナ、ソウレンバ
ナ、シレイグサ、シビレ、シブライ、
ネコグルマ、マンジユシャゲ」……等々」

あげていくときりがない。全国では、
*3 417にもおふズという。それだけ古
くから、人々の生活とともに生きてきた
花といえよう。

= 植物の生活をみる。 =

ところで、「植物の生活」の学習にお

いて、使ったことがある。

それは、花の咲いているときだけみると、スルスルとのびた莖と、元気で咲いた花だけが目につき、「こんな、栄養どうしたんかな」と見るとおどろく。「どっかに栄養ためとるんとちがうか」「あの下に、球根あるや見たことあるぞ...」と、子どもたちは言う。なるほど掘って見ると、りっぱな（リコネ）が出て来るのである。でも、どうして、いつ、あの球根に栄養をためたのだらう。

それは、冬のあいだも、緑あざやかに、「キツネノカミソリ」といわれる葉を繁らせ、光をいっぱい吸収し込み、この「彼岸」へのエネルギーをたくわえているのである。それを知るとき、ここにぞ、すごい「植物の生活」が見えてくる。

= 球根からデンプンを... =

この球根からデンプンとり、というのぞ、おもしろいのは...。現に、こんな話もある。

*4 おそらく稲作農業の渡来と、ヒガンバナの渡来と関係していると思われる。弥生時代の今から 4000年ほどの昔と考えられる。さて、このころ何んの

目的で運ばれたか、いちばんスナリと考えられるのは食用である。球根の澱粉を食物源としたのであろう。しかと栽培法から考えると、主食にしたとは思えない。稲とほぼ同時代に渡来したとなると、稲がとれないときの救荒食物とされたのであろう。^{*5} 昭和初期の四国地方では、島のわきや水田の畔にヒガンバナの球根を植え、ヒガンバナ餅を作って喰べていた事実もある。救荒食物としてのヒガンバナ栽培は、江戸時代初期の^{カマヤ}甘藷渡来で終止符をうたれ、それからは、野に咲く草花として生き延びてきたのである。

ただし、アルカロイド性の毒、リコニンというものを含まらしいので、水さらしを必要とするであろう。

今は、つる植物のデンプンとりと、一緒に、この彼岸花のデンプンとりに、挑戦してみようかと、あの紅い、まばゆいほどの行列を見ながら考えている。

*1.2 定本 柳田泉男集 第22巻 「野草雑言」より

*3.4.5 自然観察の方法 金井郁夫著 講談社現代新書より

*3. もつと59頁、1140をこえるという話もあり。橋本さんより

< 楠田 >